

# なごみつつうしん

発行日：平成 28 年 5 月 23 日（第 17 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「働く」とは、「人」が「動く」こと。「働く」ことの意味を私に教えてくれた物語です。

所長 小沢浩

## ～日本理化学工業～

日本理化学工業という会社を知っているだろうか。この会社はチョコレート製造では全国シェア 30%を誇るトップ企業である。全社員 71 人のうち知的障害をもった人は 54 人いる。社長は福祉の専門家ではない。自然の経過でこの状態になったというのである。

昭和 34 年のある日の事であった。養護学校の先生がある日会社を訪れた。「今度卒業予定の子どもを採用していただけないでしょうか。」と。当時専務だった大山社長は、「お気持ちはわかりますが、うちでは無理です。」と答えた。でも、その先生はあきらめずにまたやってくる。また断る。またやってくる。また断る。3回目の訪問のときに、先生は「就職が無理なら、せめてあの子たちに働く喜びを体験させてもらえませんか。あの子たちは働く喜びを知らないまま施設で一生を終えるんです。」と頼み続けた。あまりに熱心な先生の姿に心を打たれ、1週間だけ2人の子の研修を受けることにした。会社は午前8時から午後5時まで。しかし、その子たちは雨の日も風の日も毎日7時に玄関に来ていた。研修では、それはそれは一生懸命に働く。休み時間、昼休みも仕事に没頭して、手を休めようとしな。毎日背中を叩いて休みや仕事の終わり

を教えた。本当に幸せそうに一生懸命仕事をしていた。あつという間の1週間。その1週間が過ぎた時、十数人の社員全員が大山さんを取り囲んだ。「大山さん、どうかあの2人の少女を採用してください。あの子たちにできないことがあるなら、私たちがみんなでカバーします。どうかお願いします。」

それで雇うことになったというのであった。その二人がとてもよく働き、徐々に人を増やしていき現在の形になった。20 という数字がわからなくても、20 個の型にはめて箱に入れれば 20 個になる。品質チェックは、われわれよりも視覚的にはるかに優れた人がいる。最初に就職した方は定年まで勤め上げた。「障害者」といわれているその方々と私たちと何が違うのだろうか（日本でいちばん大切にしたい会社、坂本光司、2008、あさ出版 東京）。

（奇跡がくれた宝物 小沢浩著、

クリエイツかもがわ より）

